

日韓文化交流基金 NEWS



contents

- 1-3 青少年交流事業
熊本・大分の皆さんへ
韓国青少年からの応援メッセージ
- 4-5 基金講演会
韓国における二つの欲望の行方
首都大学東京 名誉教授 鄭大均
- 6-7 フェロー研究紹介
韓国巫俗の近現代
日本学術振興会 海外特別研究員 新里喜宣
- 8 助成事業
オペラで交流するという事
～その可能性のひろがり～
鳥取オペラ協会 会長 計羽孝之
- 9 助成事業
日韓学術共同セミナー
「漢字文献の受容と学問の比較研究」
慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 教授 住吉朋彦
- 10-12 日韓文化交流基金事業報告
2016 年度第 1 四半期実施事業紹介
韓国中堅者招聘プログラムを実施して
2016 年度韓国との間の招聘事業実施団体
選定に関する企画競争採用案件一覧

熊本・大分の皆さんへ韓国青少年からの応援メッセージ

去る 4 月に発生した熊本地震では、当基金の訪日プログラムの一環として訪れた学校訪問先、ホームステイ地域も大きな被害を受けました。

熊本、大分を訪れた韓国の学生たちは、訪日後も継続して、交流で訪れた地域やその地で出会った人たちに思いをさせ、自分たちにできることは何か考えています。今号ではその思いを訪日時の写真とあわせてご紹介します。

宇土中高で交流した西村君、梅川さん、 そしてホームステイ先の皆さんへ

呉鐘顯(オ・ジョンヒョン)君：国民大学校国際学専攻在学中、
2013年度熊本県訪問

学校訪問の時に交流した西村君、梅川さん、アンニョンハセヨ。
今回の地震で宇土市内や学校も被災したとのニュースを聞き、とても心配になりました。

地震についてはフェイスブックを通じて知りました。すぐに高校生訪日団のメンバーだった友人たちにも地震発生について知らせました。私が連絡した時にはすでに地震発生を知っていて、皆、現地のことを心配していたのを覚えています。

また、学校施設も被災し、地震発生後しばらく休校になっていたとのこと知りました。今は学校生活が戻ってきたと聞いて安心しています。これ以上余震が起こらないことや大きな被害が出ないことを願うばかりです。



宇土中高での授業体験の合間に記念撮影。写真左から、呉鐘顯君、梅川なるみさん、西村洋祐君、高濱宏郁さん、馬場千弥さん

天草のホームステイ先も心配でした。ホームステイ先を含めて日本には木造家屋が多く、大きな揺れで影響はなかったか心配でしたが、ホストファミリーのおじさん、おばさんも無事であったとのことで安心しました。

まだ、落ち着かず、大変なこともあるかと思いますが、宇土中高の皆さんに伝えたい言葉があります。「高校生の時が人生で最も幸せで心配事の無い時だ」という言葉が韓国にあります。

高校時代は友人関係、学校などでいろいろな経験をしたいと思います。悩みや大変なこともあるかと思いますが、そんなとき、そばにいる友人に悩みを打ち明けて相談したり、大変な時には支え合ったりできるのも高校時代で、そのような時間こそ最も幸せな時間だと思います。

何事にも積極的に取り組んで、元気で充実した高校生活を送れることを願っています。最後に韓国高校生訪日団の全員が心をひとつに熊本の皆さんのことを応援していると伝えたいです。

熊本の復興のために

鄭振成(チョン・ジンソン)君：慶北・伊西高校在学中、
2015年度熊本県訪問

地震については、日本の友人のツイッターで知りました。その後、韓国のインターネットニュースを通じて、熊本城の一部が崩れ、断続的に余震が続くなど広範囲に被害が出ている具体的な状況を知りました。

状況を知るにつれて、「あ、そこは去年訪れた場所じゃない!? 出会った人たちは無事だろうか、津波が襲ってきたりしないだろうか」という心配が先立ち、学校訪問で出会った牛深高校の友人たちの安否を確かめるため、LINE を通じてやり取りし、無事を確認しました。そして状況が落ち着いてから、ホームステイ先にも電話をかけ、無事を確認できました。



牛深高校郷土芸能部の生徒の指導のもと、「牛深ハイヤ節」の振付を教わる。写真右から二番目が鄭振成君。

熊本を訪れ、そこでかけがえのない人と出会った者として、できることがあれば助けてあげたいという思いがあります。

一方、現在高校三年生で受験を控えているため、直接手伝いに行くこともできないことが悩ましいです。しかし韓国に居ながらも復興のために熊本県から輸入される商品の購入や、私の身の回りの韓国の友人たちにも引き続き、熊本地震について関心を持ってもらえるようなことをしていきたいと思っています。



熊本県の魅力についての講義ではくまモンも登場

日本にいる友人・知人のためにも

鄭勝祐(チョン・スンウ)君：済州大学校日語日文学科在学中、
2013年度大分県訪問

熊本地震の発生時は、大阪に住む留学時代の友人と SNS でちょうどやりとりをしている時でした。熊本で発生した揺れが大阪まで達するほどの大きな地震だったと知り、大変驚きました。私自身も日本留学中に震度 2 の揺れを経験したことがあり、それさえ大変驚いたのに、今回の地震はそれをはるかに超える大きな揺れのため、被害を受けた地域は深刻なことになっているのではと心配になりました。

地震発生後、九州出身の友人たちの安否が気になり、無事を確認しようと、すぐに SNS でメッセージを送ったのですが、明け方近くになっても返事が来ずとても不安になりました。翌朝ようやく二人の友人から無事との連絡があり、ひと安心したのを覚えています。今回の地震を通して、日ごろから友人の事を思い、頻りに連絡を取り合うことがとても大切なことではないかと思いました。

地震に豪雨と大変な状況であると思いますが、熊本県ではくまモンが幸せを多くの人たちに与えてくれますように、そして大分県では温泉で多くの人たちをリラックスさせる場所として、両県に一日も早く多くの観光客が戻ってくることを願っています。

これからも日本との関わりを持つ一人として

尹僖珠(ユン・ヒジユ)さん: 西京大学校国際ビジネス語学部在学中、
2014年度大分県訪問

将来、日本の大学院進学や就職を目標としており、韓国に
いながら日本のニュースや情報をすぐに知ることができるよう
に、普段から日本語のニュースサイトなどをよく見えています。
地震のあった日もニュースサイトを見ていたところ、ニュース
速報で地震発生を知りました。すぐに日本に留学している友人
たちのことが気になり、地震発生の翌日、大学の国際交流課を
訪れて、現在日本に留学している友人たちの安否を確認しまし
た。幸い大分大学に留学している友人の無事も確認できました。
地震によって一瞬で生活の場を奪われ、想像しがたい苦しみ
にあわれたと思いますが、是非とも希望を持って頑張してほしい
です。



竹田市でのホームステイを終え、出発前に涙ながらに挨拶を交わす。写真中央が尹僖珠さん。

人情の厚い九州の人たちと笑顔で再会できることを望んでいます

方敏智(バン・ミンジ)さん: 関西外国語大学留学中、
2014年度熊本県訪問

現在、大阪にある大学に留学して二年目になります。熊本地
震のニュースを聞いた瞬間、訪日団で出会った熊本県大の学生
たちや、一緒に歩いた熊本の街並みが思い出されて、気持ちが
落ち着きませんでした。地震発生以降はニュースで被災地域の
現状を追い続け、熊本城の姿や被災した方々の姿を見るたびに
心痛めています。自分にできることは何かないかと考え、地域
復興の募金に協力したりしています。また、地震で被災した地
域のことを私たちが関心を持ち続けて、応援していくことが大
切だと思えます。

私にとって、九州は人情にあふれる場所です。九州で出会っ
た皆さんが私たちに最初に手を差し出して、親切にしてくだ
さったことは今も覚えています。必ず九州を再訪します。どう
かその時には、最初に皆さんと会った時のように、笑顔でお会
いできるように、いつも応援しています！



熊本の伝統工芸「花手箱」の絵付けも体験

留学後1か月で熊本地震を経験

李主成(イ・ジュソン)君: 早稲田大学留学中、
2016年1月熊本県訪問

早稲田大学に留学するために、今年の3月に来日しました。
およそその一か月後に熊本地震が起こり、今年1月に訪日団で
訪れた熊本城の地震後の姿を見て、とても驚きました。地震の
報を聞いて、1月にホームステイでお世話になったホストファ
ミリーにも連絡をして、幸い無事であったとのこと聞いて
安心しました。本来であれば、ボランティア活動などで積極的
な支援をしたかったのですが、「今」できることは何かを考え、
大学や駅前で行われている支援募金に協力しました。

熊本・大分では地震が地域経済にも大きな影響を及ぼしてい
ると聞きました。観光などで地域を訪れる人たちのためにも安
全を第一に、またSNSなどを通じての復旧・復興状況を伝える
ことも大切ではないかと思います。余震が収まり、地域の人た
ちの日常が取り戻せるように祈っています。



熊本学園大学訪問時、熊本日新聞記者からのインタビューに答える李主成君

韓国における二つの欲望の行方

首都大学東京名誉教授

鄭 大均

2016年度の基金講演会は「日韓の違いと近似性」をテーマに3回シリーズで行います。今号では、6月27日に行われた鄭大均さん（首都大学東京名誉教授）の講演についてご紹介します。

1. 二つの欲望

今は亡き人類学者のクリフォード・ギアーツがいていたことだが、第二次世界大戦後に独立した「新興国」(new state)に生きる人々には、二つの欲望（動機）に同時に駆り立てられる状況があって、両者の間に良い緊張関係が維持されるとき国家は発展の推進力を得るが、二つの欲望はしばしば対立するものであり、それは国家の発展を妨げる最大の障害になるものでもある。

二つの欲望とはなにか。一方が国際社会で重んじられる存在、名のある存在になりたいという欲望であるとしたら、他方は活力ある現代国家を建設したいとか効果的な政治体制を作りたいという欲望であり、ここでは前者を「自尊の欲望」、後者を「実利の欲望」と呼んでおくことにする。

「統合的革新」と題するこの論考で、ギアーツが念頭においていたのは多民族、多言語、多宗教のアジア・アフリカ諸国であり、二つの欲望は、二つの理由で深刻で慢性的な緊張関係を生みだすようになるという。一つは人びとの自己意識が血縁や人種、地域、言語、地域、宗教といった原初的感情（primordial sentiment）と深く結びついているからであり、もう一つは集団の目的を実現するために、独立国家の重要性が増しているからである。ギアーツの論考の初出は1963年である。アジアやアフリカに多くの独立国家が誕生し、きびしい現実に向き合わざるを得なくなかった時期に書かれたものである。

この論考に筆者が接したのは80年代末、韓国で暮らしているときのことで、「原初的感情」という言葉が心に響いた。そ



講演を聴いた若手研究者と意見を交わす鄭大均さん

れを手がかりになにかおもしろい韓国論が書けそうな気がしたが、果たせないまま、時が過ぎ、やがて論考のことも忘れていた。今、改めて論考を読んで思うのは、多くの新興国とはあまりに異質の韓国の民族的、言語的均質性ととともに、二つの欲望間により緊張関係を維持し、それをこの国の発展の推進力とした政治指導者たちの賢明さである。活力ある現代国家は自然のままにできあがるものではない。

2. 原初的感情との結びつき

その韓国に変化がやってきたのは新興国によく見られる「人心の離反」とはあべこべの「人心の一致」を契機とするもので、これは民族的均質性や言語的均質性を特徴とする国に「原初的感情」が提唱されたときになにが起きるのかを教えてくれる事例である。

では、原初的感情の提唱が多くの新興国では「人心の離反」を生みだすのに、なぜ韓国では、「人心の一致」が生みだされるのか。韓国では、国民国家のアイデンティティとして原初的感情が提唱されても、それがもう一つの集団の原初的感情と競合するとか、対立するという状況が考えにくいからである。いいかえると、多くの新興国において、原初的感情の提唱が国民としての感覚との間に葛藤を生みだし、荒廃をもたらすという失敗の経験が、やがては自国のアイデンティティとして、人種や部族や言語や宗教などを公然と掲げることが躊躇させるようになるのに対し、そのような失敗が考えにくい韓国においては



長年、韓国を見続けてきた立場から、その変化についてお話しされる鄭大均さん

むしろ原初的感情の提唱が選好されるようになるのである。原初的感情の提唱こそは「人心の一致」を生み出す方法であり、だから政治家もメディアもそれを利用しようとする。

日本の状況は、これとは似て非なるものであろう。日本もその政治的単位が言語や文化の単位にほぼ重なる国であり、また日本人に民族的ナルシズムがないわけではない。しかし自国のアイデンティティを語るときに原初的感情をもちだすことは戦後の日本においては批判されることが多かったものであり、とりわけその批判者として在日韓国・朝鮮人が果たした役割は大きい。これに比べると、韓国では、「民族」のナルシズムが語られても、それによって、自己の尊厳が傷つけられたと感じ、それに異議申し立てを試みる集団が存在しないのである。

3. 国家アイデンティティの再定義

では、韓国における二つの欲望や原初的感情の状況にはどのような変化があったのか。ここでは、「反共ナショナリズム」から「民族ナショナリズム」の国へという、国家アイデンティティ（政治的お国柄）の変化について記しておきたい。

「反共ナショナリズム」が北朝鮮との異質性を重視するとしたら、「民族ナショナリズム」はむしろその同質性を重視する。前者が「民族」(nation)より「国家」(state)を重視するとしたら、後者は「国家」より「民族」を重視する態度であり、民族と国家は一致すべきであると考ええる。「反共ナショナリズム」が北に対する南の優越性、つまり民主主義や法治主義や思想・信条の自由を重視するとしたら、「民族ナショナリズム」が重視するのは国家の「正統性」であり、日本統治期に抗日武装闘争を展開した北朝鮮には韓国よりも「民族」としての「正統性」があると考えられる思考である。

「反共ナショナリズム」と「民族ナショナリズム」のせめぎあいは韓国の歴史であり、長く優位の立場にあったのは「反共ナショナリズム」の側であったが、やがて韓国が豊かな国になり、国力が増大すると、北朝鮮に対する脅威の感覚は急激に減退し、「反共ナショナリズム」は動員力を失うようになる。今日「反共ナショナリズム」には否定的眺めが多い。しかし「反共ナショナリズム」には、韓国人のナショナリズムにある種の

ハンデを与えることによって、その原初的感情が燃えさかることを抑制し、新興国として出発した韓国が、合理的で活力ある現代国家として成長することを可能にした功績があることは銘記されてよい。「反共ナショナリズム」には「反日」を抑止する機能があったのであり、それは韓国が原初的紐帯の感情を刺激しない方法でもあった。韓国は、長い間、反日を標榜しつつも活力ある現代国家建設のために日本をうまく利用してきた国であった。韓国はその発展や繁栄に必要なモノやヒトや技術を日本からとり入れることに余念がなかったものであり、また日本人もそれに協力したのではなかったか。



講演会後の懇談会では、参加者からの質問にも答えてくださいました。

PROFILE

首都大学東京名誉教授

鄭 大均 (てい・たいきん)

1948年岩手県生まれ。首都大学東京名誉教授。ナショナル・アイデンティティや日韓関係に関心を持つ。著書に『韓国のイメージ』『イルボン日本のイメージ』『在日の耐えられない軽さ』(いずれも中公新書)、『在日・強制連行の神話』(文春新書)、最近の編書に『日韓併合期ベストエッセイ集』(ちくま文庫)がある。

■「日韓の違いと近似性」シリーズ 開催予定のお知らせ

第二回 11月28日(月) 18:30~20:30

「あなたは本当の「韓国」を知ってる!? 日韓の違いと近似性」

講師：NPO法人 日韓交流祭り協会 事務局長 権鎔大さん

第三回 2017年2月24日(金) 18:30~20:30

「日韓文化の違いと近似性—会議通訳の現場から—」(仮)

講師：日韓会議通訳 長友英子さん

各回とも、開催日の1か月前より参加申込の受付を開始します。どうぞご期待ください。

韓国巫俗の近現代

日本学術振興会海外特別研究員

新里喜宣

フェロー研究紹介のページでは、各分野の日本研究、韓国研究をされている若手研究者による様々な見解や研究結果をご紹介します。今号では、2015 年度に訪韓フェローとして研究された新里喜宣氏の研究内容についてご紹介します。

1. 巫俗・シャーマニズムとは

私の専攻は宗教学です。この学問は宗教をできる限り客観的に理解しようとするものですが、研究対象としては「巫俗（ふぞく）」、とくに 1960 年代から 80 年代の巫俗と韓国社会の関係を中心に研究を進めています。巫俗とは何なのか、という点ですが、これは日本では「シャーマニズム」と記されることが多いものです。古くは邪馬台国の卑弥呼がシャーマンであったという説もありますが、現代日本においても、東北のイタコ、沖縄のユタなどがよく知られています。シャーマンは世界各地に存在し、それぞれの文化において多様な様相を呈していますが、基本的には、神と直接交流するシャーマンを中心とした宗教現象、と定義することができるかと思います。

シャーマニズムは、韓国ではほとんど巫俗と表記されます。これには色々理由があるのですが、最大の要因は、韓国シャーマニズムには主に二つの形態がある点を挙げることができます。すなわち、世襲巫と降神巫です。世襲巫は漢江の南、降神巫は漢江の北の地域に多いとされます。降神巫は神が直接降りるとされ、それによって韓国のシャーマンである「ムーダン」になるのですが、前者の世襲巫は、代々ムーダンの家系であり、神が降りてくるのではなく、一種の職業巫としてムーダンの踊りを舞い、歌を奏で、儀礼を行うことを生業としています。



2013 年 5 月 26 日の西海岸豊漁祭（重要無形文化財 82- ナ号）。中央の女性は韓国の国巫として名高い金錦花（キム・グムファ）氏。降神巫。

世襲巫の存在は世界的にみても独特であり、韓国の学者のなかには、韓国のシャーマンはシャーマニズムの範疇には収まらないと主張する人もいます。この問題は未だ解決されていない課題であるため、ひとまず学界では古くからの用法である「巫俗」と表記する傾向があります。私もこの慣例に従って、巫俗という表記を用いています。

2. 朝鮮半島における巫俗

巫俗は朝鮮半島の歴史と共にあり続けてきた、といっても過言ではありません。高麗時代の書である『三国遺事』には、朝鮮半島の始祖として崇拜される檀君に関する記述がありますが、檀君神話は巫俗と関連があるとする学説があります。また、朝鮮時代においては儒教が国教とされ、巫俗は「淫祀」として排斥されましたが、朝鮮王朝は、巫俗を国家から完全に分離させることはできませんでした。たとえば朝鮮王朝の雨乞いの儀礼に関する行政文書を集めた『祈雨祭謄録』（ソウル大学校奎章閣韓国学研究院所蔵）では、干ばつの際、国家の機関に所属するムーダンたちが動員され、雨が降るまで彼女らに儀礼をさせたことが記されています。このような点に、朝鮮半島と巫俗の密接な関係性を見出すことができます。



韓国において陽暦の 10 月 3 日は、檀君による建国を祝う公休日（開天節）となっています。写真は太白山の頂上での 2013 年の開天節、天祭。

これは近代の韓国の歴史にも当てはまります。植民地時代においても、巫俗は民衆からの支持をうけ、ムーダンたちが提示する宗教的世界観を信仰する人が後を絶ちませんでした。これに対し朝鮮総督府は、仏教やキリスト教と違って団体として組織化されていない巫俗に対する警戒感をもち、迷信として排斥しようします。また、『東亜日報』などの新聞社に集まった近代の知識人たちも、巫俗を朝鮮の恥ずべき因習と考え、大々的な迷信打破運動を繰り広げます。歴史の単純な比較は慎まなくてはなりませんが、朝鮮半島の近代は巫俗に対してさらに重い試練を課した、と言えるかもしれません。

3. 新たな巫俗言説の台頭

巫俗を迷信として排斥する動きは、1945年の解放以降の韓国にも引き継がれることになります。しかし、解放後、とりわ

け1960年代以降は、巫俗にとってそれ以前とは少し異なる時代でもありました。すなわち、巫俗を韓国文化あるいは韓国宗教の根幹を担うものとし、再評価する動きが出始めるのです。これは巫俗にとって新しい経験であったと言えますが、1960年代以降の新しい巫俗認識については、まだ明らかになっていない部分が多く残されています。そこで私の研究は、巫俗を迷信と関連付ける言説が厳然と存在するなかで、いかにして巫俗を韓国文化、宗教の根幹と認識する視点が定着できたのか、その具体的な過程と言説の構造を明らかにすることを目標としました。

研究の方法としては、前述の『東亜日報』の他にも、『朝鮮日報』、『中央日報』、『京郷新聞』などの言論媒体において巫俗がどのように語られてきたのか、それを体系的に調べる作業が軸となります。また、韓国で広く読まれてきた雑誌、教科書、あるいは巫俗に関する国家政策の変遷なども視野に入れて研究を進めてきました。時期としては、巫俗に対する肯定的な言説が出始める1960年代を基点に、それが頂点をむかえる1980年代までを対象として、巫俗言説の形成過程を調べています。

4. セマウル運動期の迷信打破運動

まず迷信言説についてですが、解放以降の韓国における迷信打破運動の代表格は、1970年代に大々的に展開された「セマウル運動」です。セマウルとは「新しい村」という意味であり、セマウル運動とは朴正熙元大統領によって主導された農村振興運動です。セマウル運動では、疲弊した農村を象徴するものとして、巫俗が排斥の対象とされました。



慶尚北道龜尾市の朴正熙元大統領の生家にある、セマウル運動の世界的な広がりを称える記念碑。巫俗は「勤勉・自助・協同」に反するものとされました。

セマウル運動は挙国的な社会変革事業として、あらゆる階層の人々が動員された運動でした。ここで迷信として烙印を押されたことは、巫俗にとって消すことのできない苦い記憶として残っています。事実、ムーダンたちの当時は回想する本などでは、必ずと言ってもよいほどセマウル運動における弾圧の記憶が語られます。

ただ、私が調査した限り、セマウル運動期の迷信言説は、やはり植民地時代のそれとは区別するべきだと思われます。たし



2016年3月28日の恩山別神祭(重要無形文化財9号)。儀礼のまわりで写真を撮っているのは、研究者やマスコミ関係者。

かにセマウル運動が巫俗に与えた影響は計り知れないものがありますが、当時の資料を見ますと、巫俗を迷信として排斥し、村の守護神として古くから信仰されてきた古木や堂までも破壊しようとする国家を非難し、対抗する勢力が存在したことが確認できます。それは巫俗を韓国宗教の根幹と位置付けた学者たち、そのなかでも、民俗学や国文学、人類学を学んだ当時の若い研究者たちでした。彼らは巫俗に対する否定的な認識を改めようと、国家や社会に積極的な働きかけを行いました。

5. 文化・宗教の源泉としての巫俗

巫俗を迷信ではない、文化や宗教の源泉として捉える視点を最初に打ち出したのは、学者たちであったと言えます。しかし、研究者のみならず、大学生を中心とした文化サークル、詩人や作家などの文化人、または自らのアイデンティティを探索する主婦など、多様な層によって巫俗の価値が肯定されるようになります。巫俗を再評価する動きは1960年代に端を発し、セマウル運動が展開された1970年代にも止むことがなく、1980年代に頂点を迎えることになります。1980年代は民主化運動の影響などもあり、文化的な催しものが多く開かれましたが、そこにおいて巫俗の歌や踊り、儀礼は欠かせない存在となりました。このような状況ですから、政府の方も、巫俗を迷信として語ることに抑制的にならざるを得ません。さらには、巫俗の儀礼に政治家が参加しても、さほど批判を受けなくなるという面も見いだせます。



2013年4月12日の烽火山都堂クツ(ソウル特別市無形文化財34号)。クツとは巫俗の儀礼。中央の巫女の周囲にいるのは、地元の政治家、研究者など。

以上、私の研究の一端として、韓国における巫俗認識の変化について概観してみました。このように、韓国巫俗の近現代は、迷信として批判されながらも、その価値を高めていく時代でもあった、と言えるでしょう。ただ、この道のりは決して平たんなものではありませんでした。上では触れることができませんでしたが、迷信言説との関連で、巫俗を文化として語ることにに対する不満や葛藤、そして衝突があったことは看過できない事実です。このような多様な動きを体系的に捉え、その意味するところを深く理解し記述すること、これが私に課せられた最大の課題です。

PROFILE

新里喜宣(しんざと・よしのぶ)

1983年、沖縄生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得満期退学、ソウル大学校宗教学科博士課程修了。共著に『世界は宗教とこうしてつきあっている』(弘文堂、2013年)、『宗教と社会のフロンティア』(勁草書房、2012年)など。



オペラで交流するという事

～その可能性のひろがり～

鳥取オペラ協会会長

計羽孝之

1. 地方オペラの交流

私たちが住む鳥取県は、江原道と姉妹提携しており、様々な交流が実施されています。そんな中でオペラ交流を画策したのは、鳥取県文化団体連合会と江原道芸術文化総連合会のオペラ関係者です。現在はそれぞれの団体に加入している文化活動者が、お互いの国を訪問し合いオペラ交流するものです。その一環として、鳥取オペラ協会と江原道芸総の音楽協会が交流の合意をし、ともに演目を持ち寄り公演する方式でスタートしました。私たち鳥取オペラ協会は、韓国と価値観を共有できる新作オペラの創作と公演を行いたいというミッションを持っています。

2. これまでの交流

2010年、初めての交流は、江原道春川市春川文化芸術館において、「電話」(メノッティ作曲)を公演したことに始まります。当時は鳥取県の交流人数に制限があり、出演者の少ない演目を選び、舞台を設えての上演でした。韓国側はオペラガラコンサートで対応されました。2012年の交流では、鳥取県倉吉未来中心に会場を変え、江原道芸総音楽協会をお迎えしました。鳥取オペラ協会は「こうもり」(シュトラウス作曲)を上演し、二幕のパーティ・シーンにゲストとして江原道音楽協会のソリストに出演いただき共演を果たしました。そして2015年には、再び江原道洪川文化芸術会館において、「アマールと夜の訪問者」(メノッティ作曲)を交流公演したのです。韓国サイドは「パスティアンとパスティエヌ」(モーツァルト作曲)を上演されました。その際、江原道とのオペラの人的交流の事始めとして、まず、オーケストラと合唱、舞台設定と指揮者は韓国サイド担当とし、鳥取県はソリスト、ダンサー、演出を受け持つ共同制作を提案しました。しかし、韓国よりオーケストラの準備が出来ないとの申し入れがあり、鳥取オペラ協会としては、映像を使っでの演奏会形式として上演しました。2016年度、鳥取県倉吉未来中心にて同じ演目で公演することになり、鳥取県サイドでオーケストラを準備するとの申し入れをしましたが、既にピアノ伴奏での公演を想定されており、鳥取県のみオーケストラ伴奏公演としたのです。



江原道芸総による「パスティアンとパスティエヌ」

3. 未来の交流のビジョン

しかし、今回の交流を通して、お互いのオペラ団体のスタンスが解り、協働できることからソフトランディングし、将来的には日韓合同の公演を目指そうという合意が出来たことは大きな成果です。そして江原道にもオペラ団体が設立され、鳥取オペラ協会と提携したいとの申し入れもあり、切磋琢磨の本来的な交流が見え始めています。

鳥取オペラ協会では、オペラ交流の理想を、日韓親善に寄与するドラマ(対立軸を持った)を、協働して作り上げることに置いております。互いの民族性や文化を容認し、その歴史的交流と未来的な交流の在り方を模索する必要があると思っています。しかし、日韓の文化的な隔たりは大きく、互いの風土意識を融和に導くのは難しいかも知れません。長く尾を引く植民地支配の呪縛は未だ禍根を残したままです。もつれた想い、拮抗作用が問われる弁証法的な芸術の価値観の共有は難しいのが現実かも知れません。両国民にとって文化に直接的でないテーマ、生活に直結しない絵空事の世界での交流にとどまっているのが現状だと感じています。いくらソフトランディングといっても、これでは何のための交流なのか判りません。

4. 芸術するオペラ

そんな中で私たちは、日韓の間に横たわる微妙な問題、ほぐしたいもつれた感情をオペラ化することで、お互いの情動の根幹を知ることになるだろうと夢想しています。問題視する勢力もあるでしょうが、「たかがオペラじゃないか!」と喝破するオペラ交流が、理解し合う行動を生み出すことになると考えています。毒気を抜いた「フィガロ」でも、私たちは愛し学ぶように、オペラでしか成立しない分かり合う交流の本質があると信じています。日韓でのオペラ交流は、個々の違いを残しながら交流を模索するのが、オペラかも知れないと思っています。他者を容認するとは何か、人間同士がコミュニケーションするとは何か、鋭敏な感覚でお互いの内的世界を共有するとは何か、普段の生活の中で見失っている根源的な文化を求める力が、オペラにはあるのかもしれないと思います。



鳥取オペラ協会による「アマールと夜の訪問者」

PROFILE

計羽孝之 (とば・たかゆき)

鳥取県公立学校に音楽教師として勤務し2002年定年退職。1999年、鳥取オペラ協会を設立し会長となる。現在、鳥取県文化団体連合会副会長、倉吉文化団体協議会会長。アザレアのまち音楽祭ディレクターを務める。



日韓学術共同セミナー

「漢字文献の受容と学問の比較研究」

慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授

住吉朋彦

1. 東アジアの中の日韓文化交流

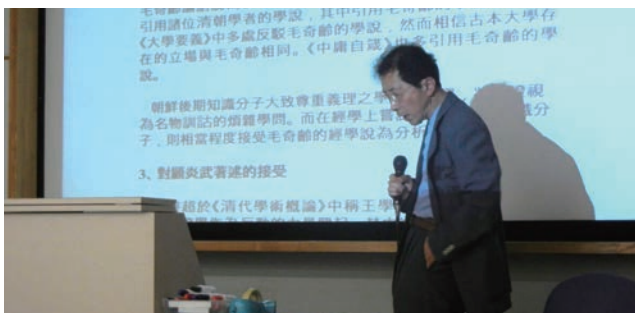
日本人にとり、韓国文化を知ることの意味は、大きく3つに分けられるのではないのでしょうか。第1に、世界の多様な文化の1つとして知り、感じ、楽しむこと。第2に、同じ東アジア文化圏の一員として、鏡映しのように参照すること。第3には、日韓が直接に関わり、影響を与え合ってきた経緯を理解することです。

今回、開催した日韓学術共同セミナー「漢字文献の受容と学問の比較研究」では、高麗大学校漢文学科の沈慶昊（シム・ギョンホ）教授をお招きし、本年6月3日、5日の2日間、長時間にわたりお話を伺うことができました。沈教授は、韓国漢文学研究の大家であり、その学識の博さは日本の学界にも鳴り響いています。

韓国古典文学の作品には、漢文の著作が多く、沈教授がお勤めの高麗大では専門の学科を置かれているほどです。一方、韓国と日本は、東アジア文化圏の一員として、漢文による表現を共有してきました。そこで私たちのセミナーでは、韓国文化を知る意味として挙げた第2の点が、大きな関心事になりました。

沈教授は、韓国漢文学の表現と、その背景にある書籍の流通と受容に関する考察を息長く続けられ、2002年に『国文学研究と文献学』、2012年には大作『韓国漢文基礎学』3巻（いずれも韓文、太学社）を上梓されるなど、研究を大成して来られました。私の知る限り、本セミナーの講師として最適任の人物です。沈教授は、今回、全て流暢な日本語でご発表下さり、先生にはご負担をおかけしましたが、日本の聴衆にとっては大きな福音となりました。

なお今回のセミナーを企画した私ども斯道文庫は、日本と東洋の古典を書誌学的に研究する、慶應義塾大学の附属研究所です。書誌学とは、書籍の内容だけでなく、その形式や流通の問題を含め、総合的に扱う学問です。広く資料の原本を搜索し、自らも原本を集め収蔵することから、文庫の名が付けられています。詳しくはウェブサイト（<http://www.sido.keio.ac.jp/>）をご覧ください。



朝鮮漢学の解説をする沈慶昊教授

2. 韓国文学研究と文献学、書誌学

今回のセミナーに集まった聴衆は、専門の研究者がほとんどでした。その代わり、テーマを韓国文学に絞らず、漢字文献の受容という、間口の広い設定としたことから、中国や日本の文学、歴史、思想、仏教文献学といった、広い分野の専門家が足を運んで下さいました。その中には、若手の研究者と、日本に滞在されている韓国、中国、台湾、米国の研究者が含まれ、東アジア研究の結節を作ることができたのは幸いでした。

さて、セミナーの内容を要約しますと、古代から朝鮮王朝にいたる歴史の中で、韓半島ではどのような漢籍が流通し、どのように読まれ、再編されたか。そして、その土壌からどのような漢文表現が花開いたかが、詳しく紹介されました。それは三国、新羅時代の碑文や高麗時代の仏教漢文、朝鮮時代の「正統」思想や文学、主流となり得なかった異説や俗文学の表現など、朝鮮漢文学の豊かな実りを私たちに教えるものでした。

またその中で、沈教授が強調された点は、中国の古典漢文を正統と考えた場合に、不完全と見なされる韓国独自の文体も、韓国文化や東アジアの全体を見渡した時には、特有の価値があることで、これは中国の通俗文学や、日本漢文学の評価とも通底するため、関係の研究者から強い共感が示されました。

さらに、書籍の内容を定位する文献学と、書籍の形式や流通を視野に含めた書誌学とは、互いに境界を設けず、相即的な検討を怠ってはならないとされた沈教授の提言は、特に貴重な示唆と感じられました。今後は沈教授の論説を、広く日本に紹介して行きたいと考えています。



沈慶昊教授の解説を聴く各国の漢文学者

PROFILE

住吉朋彦（すみよし・ともひこ）

1968年生まれ。慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授。専門は東洋書誌学。著書に『中世日本漢学の基礎研究 韻類編』（2012、東京 汲古書院）、共著に『東アジアの木版印刷 韓中日木版印刷の実態と現況』（韓文、2008、安東 韓国国学振興院）などがある。



日韓文化交流基金事業報告

本号では、2016年度第1四半期（2016年4月1日から6月30日まで）の実施事業を紹介します。

青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国教員 (第1団)	李州浩（イ・ジュホ） 国立国際教育院国際交流支援部部長	20	11	9	5/24～6/2	奈良県宇陀市、神奈川県立弥栄高等学校、宇陀市立室生中学校
韓国教員 (第2団)	林承鎬（イム・スンホ） 城沙中学校校長	20	7	13	5/24～6/2	奈良県奈良市、埼玉県立南稜高等学校、奈良市立京西中学校
韓国教員 (第3団)	李永雨（イ・ヨンウ） 国立国際教育院企画管理部書記官	20	7	13	6/7～6/16	愛知県稲沢市、埼玉県三郷市立彦成小学校、稲沢市立下津小学校
韓国教員 (第4団)	李美淑（イ・ミスク） 新東初等学校校長	20	9	11	6/7～6/16	奈良県橿原市、東京都世田谷区立船橋小学校、橿原市立晩成小学校

今号では、教員訪日団のプログラムの様子を日程中の写真やエピソードを交えてご紹介します

訪日1日目 成田国際空港から入国、1,2団：東京国立博物館見学、3,4団：江戸東京博物館見学

2日目 全団：特別講義「日本の教育事情について－少子高齢化、学習指導要領の変化を中心に」、文化体験(1,2団：能体験、3,4団：着物着付け体験)



韓国での公演経験もある宝生流能楽師の辰巳満次郎氏の指導により所作を学んだほか、貴重な能面を見せてもらいました。体験を終えた先生たちは、韓国の生徒たちに日本の伝統文化、歴史を伝えたいと語っていました。

3日目 山梨県内見学(ワイン醸造所、県立リニア見学センター、県立富士ビジターセンター)

特産の甲州ワインの醸造所では、春の温かい日差しを浴びて育つブドウの様子を見たり、ワインの製造工程を興味深く見ました。



4日目 学校交流1団：神奈川県立弥栄高等学校、2団：埼玉県立南稜高等学校、3団：埼玉県三郷市立彦成小学校、4団：東京都世田谷区立船橋小学校を訪問。



彦成小学校では全校集会に参加。「うんとこしょ」「どっこいしょ」と大きなかぶを相手に日本と韓国の先生が力をあわせました。

5日目 1,2団：奈良県へ移動

1団：地場産業(手延べそうめん作り)体験、2団：奈良市の魅力に関する講義、3団：愛知県へ移動、4団：奈良県へ移動、両県の地場産業・特産品関連施設訪問及び文化体験
全団ホームステイ対面式

6日目 ホームステイ



ホストファミリーから心のこもった直筆の歓迎のメッセージをいただきました。「一期一会」日本での出会いを大切にしたいです。

7日目 1団：奈良県宇陀市の魅力に関する講義、宇陀市立室生中学校訪問、2団：東大寺視察、学校交流:奈良市立京西中学校、3団：学校交流:稲沢市立下津小学校、愛知県稲沢市の魅力に関する講義、4団：学校交流:橿原市晩成小学校

室生中学校訪問では、普段は教える立場の韓国の先生たちも、生徒と一緒に、給食、掃除、休み時間には腕相撲をしたり中学生の一日を体験しました。一緒に行ったぞうきんがけでは学生の頃を思い出して楽しんでいる様子も見られました。



晩成小学校訪問では、訪日団の先生たちが韓国について発表をした後、子どもたちの質問の時間もあり、質問のひとつひとつ丁寧にこたえました。

8日目 1,2団：大阪企業家ミュージアム、大阪城見学
3団：近江八幡市八幡堀めぐり、朝鮮通信使関連施設等見学、4団：平等院鳳凰堂見学、文化体験(抹茶作り、着物着付け)

9日目 1,2団：平等院鳳凰堂見学、文化体験(抹茶作り、着物着付け)、
3,4団：教育関連施設(大阪府教育センター)見学、文化体験(能)
全団：成果報告会

10日目 関西国際空港より帰国

韓国内堅者招聘プログラムを実施して ～事業実施後のフォローアップを中心に～

2016年2月から3月の4回に分けて、韓国のマスコミ、企業、団体の若手中堅者28名を招聘しました。本プログラムの第2団で来日した釜山・国際新聞の李在敏（イ・ジェミン）記者によるフォローアップ事例とプログラムの感想について改めて伺いましたので、ご紹介します。

青森を旅してから5か月が過ぎて思うこと

このところ連日猛暑が続いている。流れる汗で服がぬれるたびに、3月に行ってきた青森のことが思い出される。新青森駅を出ると、歓迎のあいさつのように降る雪と白い八甲田の雪山を思うととても涼しい気分になる。日本に旅行したことのある会社の同僚たちに青森に行ったことがあるというと、彼らは羨望のまなざしで私を見ていた。日本の人たちもなかなか行くこ

とのできない地域らしく、韓国人にとってはなおさらである。陳腐な表現かもしれないが、夢のような時間がとても懐かしい。青森に行ってきたから5か月が経った。その時に一緒に旅をしたメンバーとは今も月に一度会っている。彼らと会うたび、いつも青森の旅の思い出を話している。そして皆が口をそろえて、「もう一度必ず青森に行こう」と言っている。

（国際新聞 李在敏 記者）

日程紹介

- 3/ 7 (月) 到着（成田国際空港）、都内視察（東京スカイツリー及び浅草六区再開発エリア）、歓迎晩餐会兼日韓交流に関する懇談
- 3/ 8 (火) 高麗神社（埼玉県）視察、川越の街並み視察、青森県へ移動
- 3/ 9 (水) 青森県庁表敬訪問、青森県の魅力と韓国との交流の現状の説明及び意見交換
日韓交流民間団体「あおりコリアネット」の方々と青森市街地視察及び交流会、八甲田地域視察、三沢市へ移動
青森の郷土芸能と祭文化体験（津軽三味線・ねぶた等）
- 3/10 (木) 十和田市現代美術館及び「Arts Towada」エリア視察、大阪府へ移動、日韓観光交流に関する懇談
- 3/11 (金) 帰国（関西国際空港）



青森市の古川市場にて名物「のっけ丼」に舌鼓を打つ（写真中央は一行を案内してくださったあおりコリアネットの角理事長）



青森県観光国際戦略局 高坂局長(前列左から3人目)と訪日団一行（李在敏記者は前列右から2人目）

2016年度韓国との間の招聘事業実施団体選定 に関する企画競争採用案件一覧

昨年に続き、青少年交流事業の一環として、韓国との間での招聘事業を実施する団体を対象に企画競争公募を実施しました。今年度は下記の16件の外部団体に支援することが決定しました。

事業名	申請団体	開催日時	招へい人数
「第23回日韓高校生交流キャンプ」	一般社団法人 日韓経済協会	7/29 ～ 8/3	58
ふくしまと韓国の架けはし プログラム	NPO法人 ふくかんねっと	8/1 ～ 8/10	100
ユース朝鮮通信使として日本の魅力を発信する： 地産地消の食を中心として	NPO法人 日中韓から世界へ	8/19 ～ 8/28	30
日韓中の未来～学生がふじのくから発信	静岡県・韓国人大学生受入実行委員会	8/22 ～ 8/25	8
天理大学・釜山大学校「日本のなかの韓国文化」 学生調査団・近畿編	天理大学 韓国・朝鮮語専攻	8/24 ～ 8/30	25
日本・秋田クリエイター交流プロジェクト	秋田空港利用促進協議会	10/1 ～ 10/10	33
GO!2018信州総文祭 プレプレ大会日韓国際交流 ステージ	長野県高等学校文化連盟 国際交流部会	10/25 ～ 11/1	33
JENESYS2016韓国大学生訪日団第1陣(農業/環 境・エネルギー)	一般財団法人 日本国際協力センター	10/25 ～ 11/3	60
文化の創造力・発信力	公益財団法人 大阪国際交流センター	11/3 ～ 11/13	33
海友会那賀ブロック 日本韓国青年交流事業	海友会那賀ブロック	11/19 ～ 11/28	35
韓国との間の招へい事業	一般社団法人 国際フレンドシップ協会	11/23 ～ 12/1	33
日韓農食品文化学生交流	久能いちご産地研究会	12/5 ～ 12/14	24
日韓共同教育「多文化共生と街づくり」	東洋大学国際地域学部	12/12 ～ 12/21	49
日韓学生観光交流促進プロジェクト	跡見学園女子大学 村上ゼミ	12/19 ～ 12/27	34
水原市青年訪日研修事業	静岡市国際交流協会	1/10 ～ 1/19	27
College of Asia Pacific(日韓米国際共同教育プ ログラム)「キャンパス日本」	西南学院大学	2/14 ～ 2/21	21
年間招へい人数(予定)			603



表紙絵画紹介

作品タイトル『赤松と池』(作者：桤崎正博)

まばゆい日差しに輝く芝生と赤松の日蔭のコントラストを強調して画いた。日韓の間にも共に協調して相互に輝いた時もあれば、不協和音の出る事もある。これからも丈夫な赤松のように、千年の緑を誇り合いたいものである。